

幼兒の心理的發達 四

東京家政大學教授 山下俊郎

三、三歲兒の心理的發達 (ついで)

(3) 情緒的發達

三歲兒の情緒的發達を見て行くのに、先ずそのはつきりした現われである泣くことを觀察して見よう。三歲兒は、二歲兒ほどではないが、まだよく泣く。困つたり、非常に不快なことがあるとすぐに泣くのである。

このように泣くということには、いつでもそうであるように、そのおくに何かの情緒が動いている。このような情緒の動きの中で、まず觀察しなければならぬのは恐れである。二歲兒のところまで述べたように、恐れは二歲頃からだん／＼現われるようになって来て、幼兒の情緒的發達の中で大事な位置を占めてゐる。三歲兒では、恐れが段々分化して來るのである。全體的に云えば、段々と特殊なものを恐がるようになって來る。この年令の幼兒の恐がるものには、視覺的なもの、つまり眼で見えるものが多い。皮膚の色の違ふ外國人とか、しわの多い老人とか、グロテスクなものや、お面(例えば能面のよつなもの)と云つたようなもの、くらやみ、犬や猫その他の動物、それから時としてはおまわりさんとか、或る種の物賣りというようなものが、この年令の幼兒の恐がるものゝ代表的なものである。恐れは幼兒の精神生活全體に亘る非常に深い影響を持つてゐるので特に氣をつけなければならぬものであるが、それにはこのような恐れは分化がどのようにして行われるものかということを考えて見る必要がある。幼兒の恐れは色々の條件によつてゐる／＼の對象と結びついて行くものであるが、そのうち根本的なものとして、既に二歲兒の所で述べた幼兒の生活が段々範圍を擴げて來るに従つて幼兒の知り得ない、分らないものによつて來ることが多いということが挙げられる。これに對しては、幼兒に出來るだけ自分の環境に對する正しい知識を與えるように力めることが必要になつて來る。それから次には暗示が非常

に大きい。一口に云えばおどかしである。「お化けが出るよ」とか、「〇〇につれてつて貰うから」とかと云つて、おどかして言うことを聞かせようとする幼児の扱い方が、過去のわたくし達のまわりに何と多かつたことだろう。こう云つておどかすことはそのおどかしの材料に使われているものが恐いよという暗示をかけていることになるのであつて、このような暗示は絶対に避けたいものである。それから次には、幼児に著しい模倣の影響に氣をつけなければならぬ。まわりの者の恐がるものは、必ずと云つていゝ位幼児の恐がるものになる。まわりの者が餘計な恐怖心を示さないように氣をつけることが必要である。恐れ^の分化の起つて來る條件はまだこの外にも二三あるが、最も大事なものは以上の三つである。恐れがまさに分化しようとしているこの年令の幼児の保育に於ては特に氣をつけたいものである。

次に、怒りの情緒にも氣をつけたい。何か氣に入らないことがあると、怒つて、かんしやくを起して、泣いたり、まわりの人をひつかいたり、ひつくり返つたり、足踏みしたりして、いわば自分の身體全體でまわりにぶつかつて行くといふような表現をすることが、二歳臺の幼児の特徴であつたが、三歳兒になるとそういうことが大分少なくなつて來るのが普通である。この年令になると、二歳兒に比べて多少は自制力が出て來て、まわりの者に對してぶつかつて行くような攻撃的な行動が段々少なくなつて來る。というのは、怒りの表現をいわゆるひつかいたり、けつたりするといふような

身體的攻撃でするのでなくて、どなつたり、悪口を云つたりするといふような怒りの原因も、二歳臺では、自分の思う通りに動きたいといふ身體的活動を邪魔されて自分の思うように自由に行かないといふ所に原因のある事が多かつたのが、三歳臺になつて來ると、自分の持物をとられたとか自分の考へていた計畫が邪魔されたとかいふようなことに段々移つて來るようになるのが普通である。このような三歳兒に於ける怒りの發達を見ると、自分自身の情緒を統禦するといふことをこの年令の幼児はまさに身につけつゝある段階にいるといふことが出来るであらう。その意味でこの年令の幼児が、どうしてそのようなことを身につけつゝあるかと云うことをわたくし達は考へなければならぬ。このことに就いてわたくし達の考へなければならぬことは、いろ／＼あるが、そのうちの最も根本的な一つの點に就いてだけおれ置きたい。それは、怒りの本質に連關する問題である。いま、見た所で分るように、怒りといふ情緒は幼児の自我の欲求に關係する。すなわち、自分がこうしたいと思つているその欲求をじやまするものがあるとき、これに對して起つて來るのが怒りである。そこで、この怒りが、中心のない單なるかんしやくに移つて行かないようにする爲に、第一には、幼兒が怒つているとき、たと單に泣いたりわめいたりあばれたりすることが、決して自分の思ふことを通す手段にならないように氣をつけなければならぬ。怒つて泣いてるとき、もし幼

兒の欲求が正しいものであれば、自分のやりたいことをやるにはどうしたらやれるようになるかということ、を幼児に教えてやること、がその第一であり、次には、もし幼児のやりたいと思うことが無理であればいくら泣いてもわめいてもさわりでも、徹底的にとり合わないで知らん顔をしているという一貫した方針をとることが必要である。このようにすれば、まさに、自分の情緒の自制をまさに身につけようとして、この年令の幼児は、圓滿な情緒の發達をたどることが出来るであらう。

さて、このように怒りに見られるその表現の發達的特徴は、原則的には、ほかの情緒にも見られる。即ち、幼兒が何か嬉しいことがあつて喜ぶとき、二歳兒までは、たゞ身體的な表現でこれを現わすことが多いのであるが、三歳兒になると言語的表現が多くなつて来る。喜ぶ場合に、喜びを言葉で現わすようになり始めるのである。言葉のおかしさや、かぎやく等も理解して喜ぶようになって来る。

三歳兒になると愛情の發達も著しく見られる。子供どうし仲よくし、助け合つたり、同じことを一緒にして喜ぶというような傾向がそろ／＼出て來始める。また、小さいもの、動物や鳥などを可愛がるというようすもそろ／＼見られるようになる。これが普通である。

この年令の幼兒は特に、色々のことが自分で出来るようになったことに大きな喜びを感じ、誇りを持つてゐる。現に運動の發達の所でも見たように、そしてまた後に社會的發達の

項でも述べるように、三歳兒になると、急に色々のことが出来るようになって来る。このことは幼兒にとつて大きい喜びであり、誇りである。ところがこのことはその反面に大人から何かと手をかけられ、干渉されることをいやがるような傾向になつて現われて來ることがある。この年令の幼兒はまだいわゆる反抗期の中にいるので、特にその傾向が強いが、この自我感情は幼兒の保育の上には、これをむしろ積極的に利用して、すべての幼兒の活動を促進して、この活動によつて幼兒がいろ／＼の力をみずから自分の身につけて行くことをたすけて行く媒劑とするようにつとめることが最も望ましいものだと考えられる。

(4) 社會的發達

いま、右に述べたように、三歳兒は身のまわりのことに於ては、可なりいろ／＼のことが出来るようになり、生活の自立の第一段の發達をとげる階梯にいる。すなわち、食事のときにははしを使うことが出来るようになり、四歳にならないうちに充分にひとりで食事出来るようになる。着物その他のものを身につけることに於ては、ボタンをひとりで掛けたり外したりすることが出来るようになり、靴をはくことも出来るようになつてゐる。またいわゆる清潔の習慣に於ても、手を自分で洗うことが出来るし、うがいなどもしつけさえすれば充分に出来るようになるのである。このようないろ／＼の日常生活の習慣——わたくし達は普通これを基本的習慣と呼

んでいる——に於て幼児が身につけることはいろいろある中でも、最も大切なことは、自分で自分のことをするといふ自立であり、自立の精神である。これはやがて生活の自治といふことにも、自分のことは自分で負うという責任ということにもつながる大事な芽生えである。事實、さきにも見たように幼児たちは、この習慣の自立を身につけることによつて、自信を持ち、自我を主張することをおぼえるようになる。社會生活に於ける基本単位としての個人の確立という意味に於てこのような生活の自立は、社會的發達の中に於て、まことに大切な意味を持つていることをわたくし達は深く考へて見なければならぬと思う。

三歳児は社會生活に於ても一つの新しい出發點にいるといつてよい。即ち、この年令になると、幼児たちは、おともだちと一緒になつてする社會的活動に入りたいという強い欲望を持ち、また實際に入り始める。三歳児に於ては、せいゝく並行的遊びが關の山であつたが、この年令になると、二人乃至三人の子供たちが一つのグループになつて遊ぶことをよくするようになるのが普通である。二歳までは、ほんとの自己中心の世界に居るが、三歳になると、おともだちとものを分け合うことが出来るようになり、また何かを代りばんこにするといふことも分り、また實行することも出来るようになる。おともだちの中に、仲よしも出來て來るようになり、その反面に仲よし以外のおともだちを排斥するといふような傾向も多少は現われるようになつて來るのである。そして、遊びを

見ているとこつと遊びが段々と盛になつて來るようすが觀取される。

この年令の幼児に社會生活に對する關心が深まつて來ていくといふことは、特に先生や外の人に話しかけて見たり、質問したりして、何といふことはなしにたゞ話しているといふことそれだけで満足している傾向が見えることにもうかゞわかるものがある。また、二歳児のような小さい幼児たちだと、主に先生がなかだちになつて他の幼児とのつながりをつけてやるということが多いのであるが、この年令になると幼児たちお互いの接觸というものが先生のなかだちをまつことなしに始まつて來る場合が多いのである。また、さきに、こつと遊びが段々盛になる傾向が見えるといふことを述べたが、この年令の幼児たちは、興味の中心が大部分自分の身のまわりのことに向けられてるので、家庭にいと、お掃除やお食事の仕度やお洗濯やちよつとしたものを運ぶといった程度のお使いのような家事のお手傳いが大好きであるが、幼稚園や保育所へ來ても、お食事の仕度でテーブルを拭くことやおやかんを運ぶことなどが大好きで必つて、こつと先生のお手傳いをするを何よりも喜ぶものである。しかし、そのくせ、もう一方では、自我感情が非常に強く、干渉されることを嫌がり、時としては反抗的になるといふこともまた、三歳児に見られる特徴の大きいものであらう。

このように三歳児の社會生活を一通り見わたして見ると、この年令の幼児はまさに社會生活といふものを(三〇頁)續く

そろ／＼身につけ始める、第一の段階に在るといふことが出来る。二歳児ではまだほんとの社會生活は始まつていない。三歳児はようやく社會生活らしいものゝ中に足をふみ入れたところだと考えられる。この意味に於てわたくし達は、學校教育法で幼稚園に入るべき幼児の就園年令が三歳と定められてゐることに一つの意義をこゝに發見することが出来ると思ふ。

(5) 三歳児の發達的特質

以上三歳児の心理的發達を四つの方面から一通り見わたし

て來た。いろ／＼の意味に於て三歳児は、何でもする子供という言葉の示す通り、めざましい發達をこれからとけて行くといふその第一段階をふみ出した所にいるといふことが出来るだろう。運動的發達、知的發達、情緒的發達、社會的發達の各々に於てすでに見たような發達のあゆみを三歳児はすすめている。學校教育法で幼稚園の就園年令が三歳を定められてゐるといふことに就いて、單にさきに述べた社會的發達の面のみからでなく、全體の發達から見通して見て、一つの意義があるといふことをわたくし達はこゝに認めること出来ると思ふのである。

日本幼稚園協會 保育講習會

期 日 七月二十一日から同二十五日まで

(午前八時から午後四時まで)
(但し二十五日は正午まで)

會 場 東京女子高等師範學校講堂及び附屬幼稚園

會 員 幼稚園及び保育所關係者 その他